

2006年8月3日

No. 1

全国公立大学教職員組合連合会 結成大会を成功裏に終え、新たな一步を踏み出す =7月9日 大阪=

2004年4月国立大学が一斉に「法人化」され、時を同じくして、公立大学にも法人化の波が否応なしに押し寄せてきています。「競争原理の導入」、「成果主義による締め付け」、「上意下達の運営システム」等、およそ大学に似つかわしくないことがら声高に叫ばれる中、改めて自らの労働者としての一面を見つめ直し、同時に研究者・教育者、そして高等教育や医療の現場を支えるため、大学人本来の社会的使命は何なのか、今ほど目をそむけることなく見つめ続けなければならない時代はないのではないのでしょうか。



このような大学をめぐる状況を踏まえ、賃金、身分保障、職場環境の整備をはじめとした勤務労働条件の改善や教育権の保障、研究成果の社会的還元、地域貢献を視野に入れた取り組みを行って行くことを基本活動とし、公立大学の全国組織の労働組合である「全国公立大学教職員組合連合会（以下公大連）」は、2006年7月9日大阪において、25大学47名の参加のもと、その結成大会を開催しました。

大会は、まず、司会である公大連設立準備委員会の寺川氏（都留文科大学教職員組合）による「今大会は、結成大会でもあり、オブザーバー参加者からの発言を認めたい。また、議決については、準構成員加盟組合も加わり、18単位組合・1個人加盟組合員の24名の代議員としたい。」との提案が、満場一致で承認され、議事へと進みました。

開会の挨拶が、同じく公大連設立準備委員会の甲原代議員（山口県立大学教職員組合）より行われ、続いて、森田代議員（神戸市外国語大学教職員組合）、稗田代議員（大阪市立大学教職員労働組合）の2名が議長団に選出されました。

議事運営委員並びに資格審査委員には、設立準備委員の高岡氏（大阪市立大学教職員労働組合）、内山代議員（同）、愛知県立大学の木幡代議員が選出され、内山代議員が委員長に互選されました。

設立準備委員会を代表して鈴木委員長から、「公大協委員会等で2年間に渡り検討してきた。賛否それぞれの意見もあったが、本日を迎えることができ、公大連結成に向け検討に携わられた方をはじめ皆様方にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。歴史ある公立大学教職員組合協議会でのよき伝統を踏まえ、これまで以上に各組合が情報を持ち寄り取り組んでいきたい。」との挨拶が行われました。



続いて、来賓の紹介とそれぞれからの挨拶を受けました。

次に、設立準備委員会より設立準備委員会の取り組みの報告と全国公立大学教職員組合連合会規約、役員選挙規程、会計規程、議事運営規程、地区協議会規程、旅費規程についての提案が行われ、全員賛成にて承認されました。

承認された役員選挙規程に基づき、選挙管理委員として、山口県立大学教職員組合の藪本氏、大阪府大学教職員組合の溝川代議員、都留文科大学教職員組合の寺川代議員を選出し、選挙管

理委員長には藪本氏が選出されました。

引き続き、役員選挙を行い、立候補者全員が代議員全員の信任を得て執行部が発足しました。

委員長	鈴木 元	(熊本県立大学教職員組合)
副委員長	前田 哲男	(山口県立大学教職員組合)
書記長	永田 隆廣	(大阪市立大学教職員労働組合)
執行委員	伊香 俊哉	(都留文科大学教職員組合)
	高岡 市朗	(大阪市立大学教職員労働組合)
	福田嘉一郎	(神戸市外国語大学教職員組合)
会計監査委員	土肥 隆	(兵庫県立大学 東地区教員組合)
	藤原 関夫	(兵庫県立大学 西地区教職員組合)

執行部を代表して鈴木新委員長より、「公立大学が置かれている厳しい情勢の中、皆さんとともに頑張っていきたい」との決意が述べられた後、「結成宣言」の提案が行われ、満場一致で採択されました。

第1号議案 2006年度運動方針と第2号議案 2006年度予算の提案の後、質疑・討論が行われ、いずれも賛成多数にて承認されました。

最後に鈴木委員長より「皆さんの知恵と力を公大連に結集して共に頑張ってくださいませ」と挨拶があり、公大連結成大会は終了しました。

来賓

全国大学高専教職員組合中央執行委員長	大西 広 氏
日本私立大学教職員組合連合執行委員	
・大阪私立大学教職員組合連合書記長	紅露 和裕 氏
公務公共サービス労働組合協議会事務局長	山本 幸司 氏
公立大学協会会長	宇野 重昭 氏
同 副会長	宮澤 夏樹 氏

議案質疑討論内容

第1号議案

「教育基本法改正、憲法改正について触れてほしい」

執行部：憲法改正については今後の取り組みで位置づけていきたい。

「短期大学や法人化されていない大学の取り組みに関してどう考えているのか」

執行部：短期大学等の法人化されていない大学についても情報収集を行い、短大同士での情報交換が行えるよう検討していきたい。

「法人化のメリット・デメリットを発信していく事が必要と思う」

執行部：法人化についても様々な事例が出てきているためどういう課題があるのかを調査していきたい。

第2号議案

「支出が突出しているが今後の予算をどう考えているのか」

執行部：情報交換を中心とした活動を行っていた公大協から、交渉・協議を行える公大連へと変わった。そのためこれまでの予算では運営できない可能性が大きい。また、そのことに伴う必要な予算を1年間の運動の中で把握しながら引き続き検討をしていきたい。



— 鈴木委員長あいさつ —

公立大学・公立短期大学の組合は、これまで情報交換を主目的とした協議会を組織し、大学間の交流と職場環境の改善に努めてまいりましたが、公立大学の法人化が急速に進む中、改めて組合としての責務を再認識せざるをえなくなりました。そこで、ほぼ2年にわたる検討の末、従来の協議会を発展的に解消し、全国公立大学教職員組合連合会（略称「公大連」）を設立することになりました。

とはいえ、組織的力量が飛躍的に向上したわけではありません。組合の全国組織としては、未だ揺籃期にあるといつてよいでしょう。初代の中央執行委員の一人として、その事実は素直に認めなければなりません。しかし、決して卑下したり、必要以上に悲観論に陥るつもりもありません。わずかずつですが、各大学での経験や情報は確実に蓄積されてきているのですし、それを生かす、多くの知恵に支えられていると信じているからです。

公立大学・公立短期大学、そして公立高等専門学校に行く末を展望しつつ、組合としての発言力を高め、それと同時に、足下の職場環境の改善を忘れず、堅実に力をつけていきたいと念じています。一つでも多くの組合の参加を、一人でも多くの個人の加盟を願っています。

来賓の方々にいただいたあいさつ

○全国大学高専教職員組合 大西委員長

全大教では、国立大学の法人化後、人事院勧告準拠ではなく、これからは法人との労使交渉によって賃金を決めていくという立場で取り組みを進めている。

公立大学教職員組合協議会から全国公立大学教職員組合連合会へと結束力ある組織になれることは非常に心強く思う。また、国立・公立・私立と設置形態の違う組織が産別組織の結成に向けて一つのステップであることを期待する次第である。将来このような国立・公立・私立大学の産別組織を結成し、共闘していきたい。

○日本私立大学教職員組合連合執行委員・大阪私立大学教職員組合連合 紅露書記長

現在 06 春闘で賃金の引き上げ、労働条件・教育研究の改善に取り組んでいる。

結成された公大連も、既に運動を展開している全大教、日本私大教連とともに、それぞれ運動を発展させ、組織を強めながら共闘できるような運動を進め、全ての大学、日本の高等教育機関を充実発展させていくための協力・共闘に頑張っていきたい。

○公務公共サービス労働組合協議会（公務労協）山本事務局長

2003 年 10 月、公務員労働者の生活や権利を守り、公務員労働組合の社会的役割を果たしていくため、旧公労協、公務員共闘、全官公の 3 つの事務局がまとまる必要があるとのことで、公務労協へと発展改組し、今日に至っている。

現在、日本社会が急速に劣化しており、公務労協では 2004 年に「良い社会をつくる公共サービスを考える研究会」を発足させ、今年 9 月に報告書を出すことになっている。本来の公共サービスについてのあり方や適正な公務員賃金は何なのか、具体的な根拠も示していきたい。

また、較差社会が広がりを見せており、今や 5,600 万人の労働者の 3 割が年収 300 万円以下となっている。こうした事態がなぜ起きるのかということ、日本の社会の重要な施策の決定過程から働く者の代表が排除されていることが一つ挙げられる。このような厳しい状況であるが、連携を深めながらともに闘っていきたい。

○公立大学協会 宇野会長

それぞれの公立大学が、法人化を選択する・しないは自由選択となっているはずだが、3 分の 1 以上は法人化の方向に進んでいる。こういった時期の中で、全国公立大学教職員組合連合会を結成されることは、理に適ったことと思っている。公立大学の法人化は多くの問題を抱えており、公立大学協会としては文部科学省、総務省、官公庁と交渉と情報交換を行い、設置協とも話し合いを行っている。今後、公大連とも協議や情報交換をしていきたいと考えている。

また、国立・公立・私立が連携することは大事であると考えている。公立大学が 21 世紀をどう生きていくのか知恵をおかりしたい。一方で我々が望んだ形でないまま始まった法人化問題という負の時代を、どうすればプラスに転嫁し、我々の活路を開くことができるのか、取り組んでいきたい。今後アイデア、意見や情報をお互いに交換し、良い意味での協議をしていけることを心から願っている。